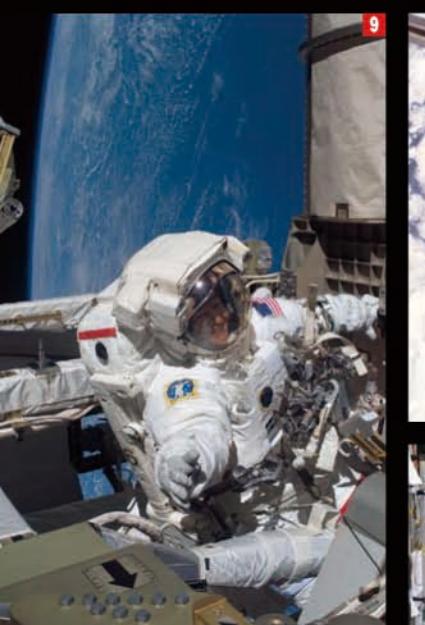
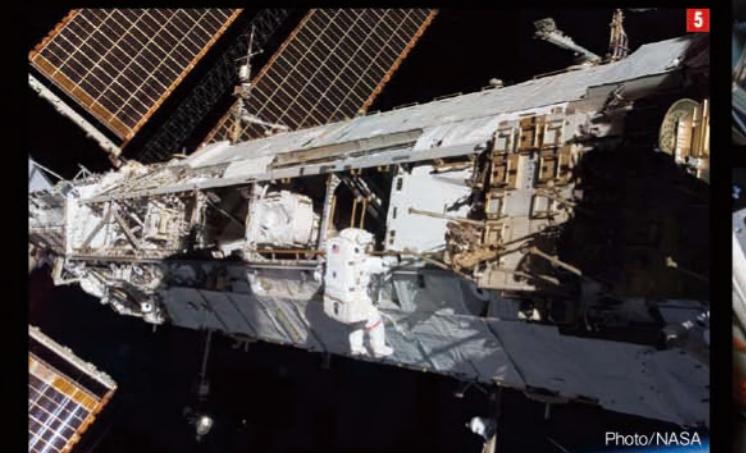
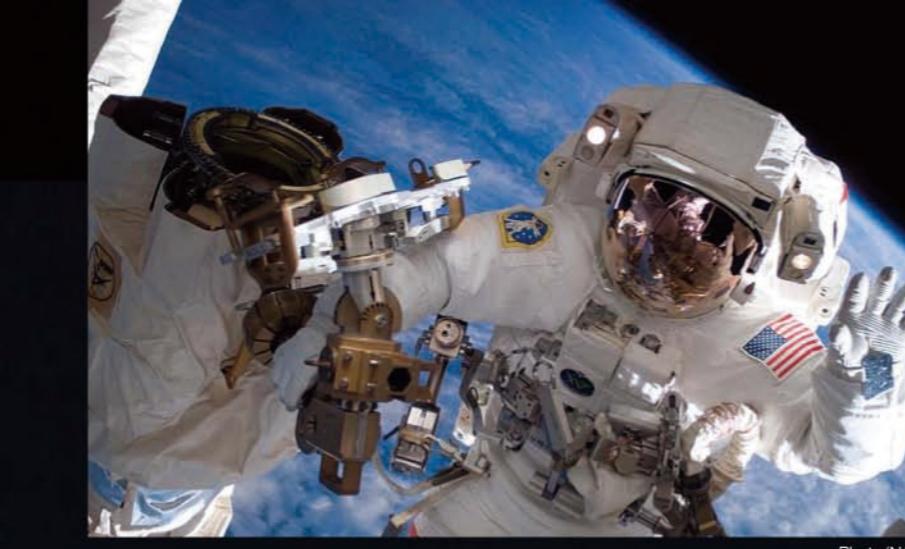


腕時計って冒険が好きだったんですね!

①国際宇宙ステーションの建設作業を行う第15次クルー(2006年12月～2007年10月)のひとり、クレイトン・アンダーソン宇宙飛行士。7時間41分にわたる船外活動を支えるのは船外活動ユニットと呼ばれる宇宙服で、生命維持装置、通信装置、飲料水パックなどが装備され、金銅で宇宙船と連結している。②③④国際宇宙ステーションでは3名または6名が常駐し、国籍はさまざまだ。そして彼らの生活の基準は腕時計が示す時刻で、オメガ スピードマスターは標準装備品のひとつとなっている。⑤2007年10月、6時間30分、船外で作業にあたったNASAのダニエル・タニ宇宙飛行士。日系3世としてはふたり目の宇宙飛行士だ。



Photo/NASA



Photo/NASA

OMEGA

50年間、宇宙から地球を見てきた腕時計

1957年生まれのスピードマスターにとって宇宙に行くなんて思いもしないことだった。ジョンソン宇宙センターがあるヒューストンの時計店でNASAの担当官が宇宙用のクロノグラフを選んだとき、スピードマスターはそのひとつだった。こうして冒険が始まった。

初めて宇宙船に乗り込んだのは1962年10月3日だつた。ウォルターシラー宇宙飛行士の腕に巻かれてひとり乗りの宇宙船マーキュリー8号で地球を6周し、9時間14分の時間を刻みながら青く美しい地球の姿に感激したものだつた。とはいえた宇宙旅行は

楽しいやない。ロケット発射や大気圏再突入のときの衝撃はとてもなく大きくて、無重量の空間はなんと妙な気分だ。ところが無事に地球に帰つてくると、今度は過酷なテストが待ち受けている。宇宙空間を想定したマイナス18度からプラス93度の温度差や強い磁場

にさらされ、衝撃、振動、無重力など、考えられるあらゆるテストが行われた。このテストにたたひつ合格した時計として1965年3月、NASAの宇宙飛行士公式標準装備品という榮誉ある称号をいただいた。その後、アポロの宇宙飛行士とともに月面を歩くこと

6回、アポロ11号のロシアの宇宙飛行士の腕にも着けられた。電子機器が故障し地球への帰還が危ぶまれたアポロ13号では14秒間のエンジン噴射時間を正確に計り、大活躍。スペースシャトル計画でも標準装備品に選ばれた。もちろん今も国際宇宙ステ

ーションに滞在する各国の宇宙飛行士といつしょに宇宙から地球を眺め続けている。半世紀の間、宇宙飛行士たちの相棒として宇宙の冒険を楽しんできたが、生まれたときは地球の外に出ることなど想像もしない、普通に作られた時計だったことが実は自慢だ。



オメガ
スピードマスター
プロフェッショナル
“ムーンウォッチ”
価格40万9500円

NASAの宇宙計画で採用された“スピードマスター”的オリジナル・モデルを踏襲する現行モデル。アポロ11号で初の月面着陸を体験したことから“ムーンウォッチ”と呼ばれる。手巻き。ケース径42mm、ステンレススチール、5気圧防水。

Photo/OMEGA

腕時計入門

1 機械式腕時計

つてなんですか？

?



古今、シエアではクオーツ・ウォッチに押され気味とはいえ、歴史上もっとも長く時計のムーブメントとして君臨してきたのがメカニカル方式。百数十個ものパートによって複雑に構成されたムーブメントが、ぜんまいの力で動く様はまさに小宇宙と呼ぶにふさわしい。



《輪列の構成図》

上下の図は輪列を表している。二番から四番車の裏側の軸にはカナと呼ばれる小型の歯車が付いている。表の歯車はカナと噛み合うため、それぞれの歯数の違いによって回転差が生じ、時針は1時間に12分の1回転(12時間で1回転)、二番車の分針は1時間に1回転、四番車の秒針は1時間に60回転(1分間に1回転)するのである。



◀機械式時計のムーブメント

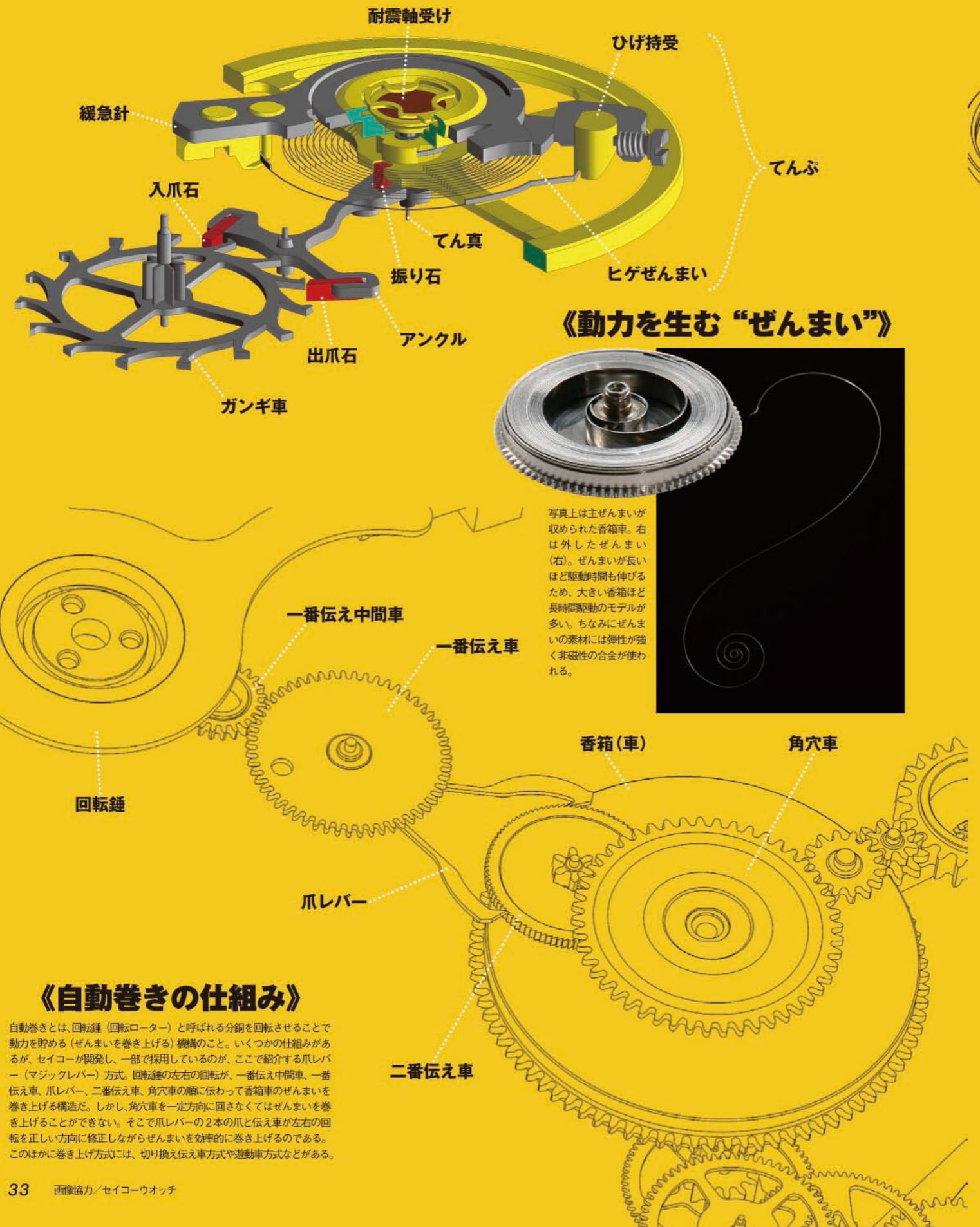
メカニカル・ウォッチ(機械式時計)は、その名の通り機械(主に歯車)によって構成され、ぜんまい(主ぜんまいとも呼ぶ)が駆動の源になっている。このぜんまいのほどける力をを利用して、時分秒針や日付、曜日表示を駆動させるのである。では、そのメカニズムを見ながらメカニカル・ウォッチの構造を説明しよう。

まず、主ぜんまいは香箱車といつ歯車のひとつに納められていて、手巻きの場合はリュウズ操作で、自動巻きの場合月は回転錐(ローター)の回転によって巻き上げることができ。この香箱車には一番車、二番車には二番車、三番車には四番車が噛み合っているため、ゼンマイの力は4つの歯車を動かすことになるのだ。ちなみにこの歯車の組み合わせを「輪列」と呼ぶ。

さて、肝心の時分秒針は簡単(時針)、二番車(分針)、四番車(秒針)に取り付けられていって、1時間につき、それぞれ12分の1回転(筒車)、1回転(二番車)、60回転(四番車)しながら時、分、秒を表示することになる。しかし、いくら長いゼンマイを備えていても、巻き上げた力を放せば、一瞬のうちにゼンマイがほどけてしまう。そこで、ぜんまいのほどけるタイミングを調整する機構が必要となってくる。それが、たんぱ、アンクル、ギャング車によって構成された脱進機と調速機(左上の図参照)だ。これらが、輪列を介して伝わってくるぜんまいのほどけるタイミングを一定に抑えることによって、規則正しい時分秒針の動きを作り出すのである。

《機械式時計の心臓部“脱進機”と“调速机”》

ぜんまいのほどけるタイミングを一定にコントロールするのが脱進機と调速机の役割だ。輪列から伝わる力によってギャング車は回転し、隣接するアンクルは左右に往復運動する。さらにアンクルはてんぶを振动させるが、その軸に据え付けたヒゲぜんまいが伸縮するため、てんぶ自体が往復運動するのである。その頻度(正しい動き(振动))が歯車の回転を適正な速度に制御する。



《自動巻きの仕組み》

自動巻きとは、回転錐(回転ローター)と呼ばれる分銅を回転させることで動力を貯める(ゼンマイを巻き上げる)機構のこと。いくつかの仕組みがあるが、セイコーが開発し一部で採用しているのが、ここで紹介する爪レバー(マジックレバー)方式。回転錐の左右の回転が、一番伝え車、一番伝え車、爪レバー、二番伝え車、角穴車の順に伝わって香箱車のゼンマイを巻き上げる構造だ。しかし、角穴車を一定方向に回さなくてはゼンマイを巻き上げることができない。そこで爪レバーの2本の爪と伝え車が左右の回転を正しい方向に修正しながらゼンマイを効率的に巻き上げるのである。このほかに巻き上げ方式には、切り替え伝え車方式や遊動車方式などがある。

